

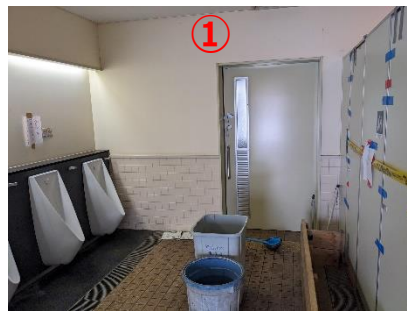
239. 令和6年能登半島地震

DX 戦略部建設 DX 課 山本哲雄

2024 年は元旦に発生した「能登半島地震」により、お正月気分から目が覚めました。今回の震災は以前に比べ、随分と早い段階から「トイレ問題」が報道で取り上げられ、同時に仮設トイレが活躍しているニュースを目にすることが多かった印象です。これまでは、ライフラインといえば、電気、ガス、水道が注目され、下水道はあとから地味に「トイレが使えないのは困る」といった話題になる感じでしたが、今回はライフラインとしての下水道が注目の的になっています。

私は、この原稿の執筆依頼を受けたあとに、石川県庁に設置された「災害支援調整隊」に派遣される機会があり、被災地を訪問することがありましたので、現地でみてきた仮設トイレの紹介をします。(時期は発災後3週間頃です)

- ①穴水駅： 元々のトイレ。小は使用可だが、洗面器で水を汲んでセルフ水洗。
大は不可。手洗い水も不可。
 - ②穴水駅： 駅前の仮設トイレ。九州地整が「道の駅うきは（福岡県）」から？
 - ③能登町役場： 建設現場やイベント会場でよく見る従来型の仮設トイレ
 - ④能登町役場： ぐんまちゃんが描いてあるので群馬県からきたトイレトレーラー。
 - ⑤能登町役場： TOYOTA と書いてある身障者用トイレ。スロープ付き。
- (④は臭いもなく、水も流れて、手洗い水も○
いつもと同じ使用感でした。素晴らしい！)



このように全国各地の様々な機関から仮設トイレが被災地に届けられ、被災者や支援者の方々が日常に近い状態でトイレが使用できるような環境が整備されていました。

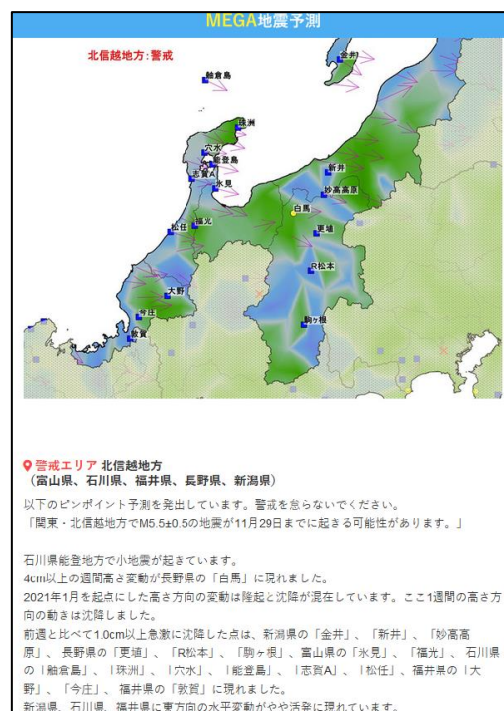
しかし問題も。仮設トイレは下水道管に接続されていないため、タンクにし尿が溜まれば処理施設まで運ばなければならない点です。七尾市では、避難所などに設置された仮設トイレに溜まったし尿を、市内の下水処理場の七尾市中央水質管理センターで受け入れたという報道もありました。こういった対応も事前準備の大切さを感じました。

さて、私がいる DX 戦略部の関する話題と言えば。

発災後早い段階から 360 度カメラを現地調査隊に持参してもらい、被災状況の概況を撮影し、クラウドサービスにアップロードするという取り組みをしました。そうすることで図面情報しかなかった既存施設の概況や被災状況などの情報が多くの関係者（現地に行っていない職員にも）に共有でき、応急復旧の検討や災害査定の準備に役立てて、災害支援の迅速化を狙っているものです。

最後に、被災地の方々が少しでも早く普段の生活が取り戻せることを切に願い、JS は被災した下水道施設の早期復旧という形で貢献していかなければという思いを強くしました。

<追>ちなみに約 1 年前に小職担当の「よもやま話」で紹介した「地震予測サービス」では、2023 年 11 月に北信越地方に M5.5±0.5 の地震発生の警戒情報を出していました。下のとおり、発生時期や規模は少しずれていますが、地震の前兆をうまく捉えている情報が発信されていました。



出典：MEGA 地震予測